暴れっ子と黙りっ子

前田茂則

ここはある幼稚園です。ちょうど、九時、いよいよ今日の学習が開始されました。

鬼ごっこを始めた子、砂遊びを始めた子、積木遊びに熱中する子、それぞれ各自各様の活動を始めました。こうした活気に満ちあふれた子どもたちの明るい声が、園内いっぱいに広がっていきます。

明日への可能性を秘めた子どもらが、喜喜として、園内いっぱいをところせましと活動している様子を見るのは、それだけでも大きな喜びです。だが、次の瞬間にこの喜びは、無残にも遠い彼方に飛び去り、なまなましい現実に直面させられてしまう。

今まで喜喜として活動を続けていた子どもたちのあるグループから、泣き声や罵声が、突然、生じて来た。

騒ぎの起きた方に目を転じると、ひとりの大柄な男の子（仮称M男）が、グループの仲間と喧嘩を始めたのである。これまでこのM男は、しばしば騒ぎを起している。

このM男のような友だちを泣かせたり、いじめたり、時には先生にくってかかる暴れっ子型を、通常、反社会性児と言っている。

さて、もう一度、いろいろな活動を展開している子どもたちに目を移してみよう。

「アレ？」今度は違ったタイプの子どもが、目についた。どのグループにも属さず、ぽつりとさみしそうな様子で、友だちの活動を見守っているのみ、という子ども（仮称T子）が、目にとまった。このような前者とは異なった黙りっ子（引っ込み）型の子どもを、非社会性児と呼んでいる。

たいていどの幼稚園でも数の多少はあっても、幼稚園という集団生活の場に適応していけないこの種の子どもを見かける。

では、一体どうして、このような子どもが生じるのだろうか？

偶然か、それとも……またこのような集団生活の場からはみ出した子どもは、もうどうにもならないものであろうか？

以下、仮称M男とT子の事例を紹介しつつ、考察を進めていこう。この両者は、幼稚園の先生の依頼によって、遊戯療法[註]による取り扱かいを通して、適応をはかることにした。

（註）遊戯療法＝幼児は遊びによって閉じこめられた情緒やおさえられた葛藤を外部に解放し、また一方自己をコントロールし、現

実の世界に近づいてゆくと考えられている。それ故、身体的、器質的な原因によらない心理的、情緒的なからくりによって生じた神経症児や行動問題児の診断と治療に、ふつう遊戯を用いて行なう方法である。

なお、この両者の遊戯治療時間は、一週一回で四十五分とし、平行して母親の面接も施行した。

暴れっ子、M男

〈概要〉 五才児で、両親、姉（八才）、本人の四人家族である。父は運送業関係の仕事を営み、経済的にはめぐまれている。本児の身体的、器質的欠陥はない。知能は進んでいるけれど、姉ほど親の要求に答えないので、特に父親は本児より姉を可愛がるようである。本児の行動に対し小言が多く、時には体罰を課すこともあるようである。

〈経過〉 本児の遊戯治療回数は、二十一回施行したが、その中で特に本児の葛藤やフラストレーション（欲求不満）の現われ、と推察される場面の経過の概略を記した。

七回目—本児は虫かごを持って、にこにこしながら、プレイ・ルーム（遊戯室）に入って来た。虫かごを治療者に示して、「これ、僕がとった虫だよ。」と自慢した。その後、しばらくの間、ひとりで自動車遊びに熱中していたが、ヘリコプターを取り出して、「オジさん、これで遊ぼうよ。」と話しかけてきた。ヘリコプターで一緒に遊んでいるうちに自然と、相互に競争をすることとなった。

特に興味ある事象は、治療者が悪人となって本児を襲撃する、という形で展開して行った。

治療者（以後、Tと略述）「よし、あの小さなヘリコプターを襲ってやれ」と言って、本児（以後、Cと略述）のヘリコプターを急襲する。Cは、旗色が悪くなってくると、各種の自動車を備えて、Tの攻撃を防ぐ。

遂に、Cは「ここは秘密の場所で見えない所だよ。」と言いながら、自分のヘリコプターを戸棚に入れた。さらにCは、自軍を強化しTに対抗するために電気機関車、水鉄砲（Cは、これを原子銃と名付けた）などの各種の玩具を用意した。Tは、ひるまずCの陣地を襲う。これに対しCは、両手に大きな自動車を持って振り廻して、Tのヘリコプターを力いっぱいたたき落し、真っ赤になって踏みにじった。さらに水鉄砲（原子銃）を持ち出して、「これでヘリコプターも、お前（治療者のこと）もやっつけてやるのだ」と大声で叫んで、「ダンダンダン」と声を出して撃ってきた。

Tが胸をおさえて、「やられた」と言って、倒れると喚声をあげて喜色満面であった。

その時、Tが（家の誰れかをやっつけたのだね？」との発言をすると、一瞬、驚いた様子を示したが、ニヤリと満足気な表情となった。

八回目—初めのうちは、電池で動く汽車遊びに熱中していた。そ

のうちに自動車競争をすることになった。最初のうちCが優勢であったけれど、後半になってTの旗色が、良くなってくると、いろいろと車を取りかえることによって、Tを追い抜こうとした。

しかし、それでも形勢を挽回することがむずかしくなると、手でTの自動車をひっくり返して、「こんな悪人の自動車なんか、こわしてしまえ」とブツブツ呟いていた。

十三回目—遊戯室に来所してから、しばらくの間、持参のコマによる遊びに熱中していた。やがて、戸棚からヘリコプターを持ち出して、「これで競争やろうよ。」と話しかけてきたので、競争遊びを始めた。

まずCとTが、相互のヘリコプターをぶつけ合う形で競争が展開されて行った。

特にTが、意図的に「パパやママのヘリコプターが、M君のヘリコプターを打ち負かしてしまうのだぞ！」との発言をして競争を続けて行くと、Cはこの遊びにものすごく熱中し、何度も何度も、「エイ、エイ、エイ」の掛け声と共に、Tのヘリコプターをたたき落とし、力いっぱい踏みにじった。

さらにCは、この遊びを発展させ、戸棚からあらゆる自動車類の玩具をおろし、その玩具の三分の一をTに配分し、自分はその三分の二を取り、これらの玩具を使って、ますますTとの競争遊びを通して、打ち負かすことにものすごく熱中した。

そして、その遊びの間に幾度も幾度も、「エエイ、やっつけてしまえ！」という感情をこめた発言を繰り返していた。

ここに記した三回の経過の概略は、最も顕著に攻撃性を発散した場面であることを、物語っている。

特にこれらの遊びの場面の中で、治療者を悪人として、治療者を攻撃する態度は、親を中心として意識的無意識的に抱いている日頃の攻撃的感情や不満感を、治療者に移動（感情転移）して、爆発させた象徴的行為と考えられる。

概要のところで述べたように、本児は姉に比べて、両親により、より多くの愛情によって育まれる機会に乏しく、また親の期待が過多であるために、同一年令の子どもに比較して、知能は相当に進んでいるにもかかわらず、日常生活では親の要求水準に合致する行動をとりえないことから、小言を言われたり、罰せられることが多く、本児の心は満たされることが少なく、こうして反社会的な行動をするようになったのである。

〈親（母親）との面接〉

M男の母親とは、合計三回の面接しか行なうことができなかった。この三回の面接内容を記すと、次のようである。

一回目—「父は、どちらかと言うと、本児よりも姉を可愛がっているし、やはり姉の方がね、しっかりしていますしね。」というような本児に対する両親の態度が述べられた。

次いで、本児の日常生活上の行動や態度について否定的な感情が表明された。

即ち、「命令的に指示されたり、人前で叱られたりすると、すぐ立腹し理屈をこねたり、泣いたりするので、たいへんみっともない。早く態度が改まってくれればよいのに。」という内容が話された。

二回目〜三回目—「遊戯治療を受けるようになってから、たいへん、行動に落ち着きが出てきましたし、親に対して反抗的な態度が減少してきた。」と笑顔で近況を述べた。

「もうこの調子だと大丈夫（母親が、ひとり合点して）。」と言ってから、直ちに本児の進学について話しを進めていった。

「この子の姉は△△学校に入学していますので、M男もぜひ○○学校に入学させませんとね。とにかく、何としてでもパスしてもらわねば……他家に対する面子もありますしね。」

という内容であった。

この三回目の面接以後、面接のための連絡を幾度かとったけれど、「もう子どもは大丈夫です。おかげさまでたいへんよくなりましたので。」との挨拶があって、母親との面接は自然消滅という形で終ってしまった。

そのために、このM男の治療は、この本児のみを対象とすることとなったのであるが、この親の態度が、M男の治療効果を水泡に終らせてしまう、という結果を生み出すことになったのである。

黙りっ子、T子

〈概要〉 五才児で、両親、姉（十三才、先妻の子）、本人、妹（三才）の五人家族。垣根を接して母方の祖父母が、住んでいる。身体的、器質面での欠陥は、よく風邪をひくという程度で特にない。知能の発達は、正常である。（もっとも、知能検査は、治療の効果が見え始めてから施行した。）

幼稚園では、ほとんど先生や友だちと話さない緘黙児である。

〈経過〉 本児に対しては十五回にわたる遊戯治療を施行した。

一回目—遊戯室に入ってから、約十五分くらい不安気な様子を示していた。そして、Cはきょろきょろと顔を動かすのみで、行動に移る気配は見られなかった。

そのうち、無言のうちに絵本に近づいて、治療者（以下Tと略）の顔を見た。

「C子ちゃんは、この絵本を見たいのね？」と尋ねると、Tの顔を見てうなずいた。

予定時間が終了するまで、絵本を見ていたけれど、一言も喋らなかった。

二回〜三回目—前回と同様に一言も喋らないで、絵本を見ることで終った。

四回目—入室して、しきりと絵本のある方に注意を向けて、時折、Tの顔を見た。

T「ああ、C子ちゃん、絵本をとってほしいのね。」と言うと、無言ではあるが、顔面に喜びの色を表わした。しばらく、椅子に坐っ

て、その本を見ていた。Tが「この絵は、何かな？」、「これは何をしているのかな？」と話しかけてみると、しばらくTの顔を見ていたが、「これはライオンよ」、「お花をとっているの」という発言をよわよわしい声であったけれど、初めてTにした。

この後、これまでの絵本読みから離れて、はめ絵遊びに熱中しだした。少し行動に積極性が現われてきた。

五回目—入室すると、すぐにはめ絵に近づき「これ」と言って指さした。はめ絵遊びに熱中し、うまく挿入できない箇所にでくわすと一瞬、Tの顔を見る。「ああ、教えてもらいたいのね。」と気持を受容してやると、にこりとうなずいた。やはり、行為によって話しかけてはくるが、発言することは、ほとんどなかった。しかし、その行動にはますます積極性、自発性が現われてきた。

六回目—遊戯室に入ってくるや、頸を前後左右に動かして、何をして遊ぼうか、という顔付である。やがて戸棚の画用紙を指さしたので、それを取ってやった。本児自からが、クレヨンを出して絵をかき始めた。

しばらくは、絵をかくことに熱中していた。この後、絵本を見る。次いで色紙を取り出して、飛行機を折り始めたので、Tも一緒になって色紙を折った。完成した飛行機を相互に飛ばして遊ぶ。この遊びにも飽きると、棚の最上段にある大型の色紙を指さして、「あれ」と要求した。それを取ってやり、「何を作るの」と聞くと、「お馬さん作るのよ。だから鋏がいるの。」と発言をした。

この経過記録からもみられるように、行動の活発化はもとより、単に行為によって話しかけてくるだけの消極的な態度が、漸次、消失し始め積極的に自分から、発言する様子が出現して来た。この傾向は、治療回数を進めて行くにつれてますます如実に現われてきた。

このC子は、治療を通して心中の葛藤や慾求不満を発散させることによって、漸次、自発性、積極性を獲得して行ったのであるが、このC子の成長発展を助成した要因として、面接を通して変化した親の態度（面接の項、参照）を指摘することができる。

〈親（母）との面接〉

C子の母親とは、合計七回の面接を行なった。その経過の概略を以下に記してみよう。

一回目—本人の生育歴、家族歴を述べた。「C子は、特に身体面、器質面で異常はないが、未熟児（出産時の体重が二五〇〇グラム以下の新生児を指す）であったので、保育器で育てた。そういうことなどから、本人の身体を心配して、ちょっとのことでも注意することに努めている。祖母も同じような態度で本人に接している。しかし、こんなに注意深く育ててきたのに、どうして幼稚園などで不活発なのでしょうね。本当に困ってしまう。」という内容が語られた。

二回〜三回目—「やはり動作が不活発ですね。物を記憶することもにぶいし、数も二十までがやっとなのですよ。子の年（C子の年

令）を尋ねても、直ぐには答えられないのですよ。これらのことから考えて、少しアレ（精神薄弱の意）ではないかと思うのですよ。

幼稚園のクラスでの動きをみていても、他のお子さんより鈍感のようだし……」というような否定的感情が、つぎつぎと表明された。

四回目―「何かこの頃、C子の行動が少し変わってきたのですよ。家でも行動が荒っぽくなったし（この現象は、遊戯治療の過程でみられる一過性のものである）、私たちから注意されると、これまで黙って泣きべそをかいていたのに文句など言い始めましたよ。案外と元気なところもあるのですね。この子がこれまで引っ込みがちだったのは、私にも責任があるように思えます。子どもばかり非難しても……」

ここに初めて、子どもに対する肯定的な態度と、自分自身の子どもに対していた態度を振り返るようになってきた。回を重ねるにつれて、子どもに対する肯定的な態度、と自己理解を深めて行くようになった。

七回目（最終回）―幼稚園に行くことを大変に喜ぶようになってきたし、積極的に文字や数を学ぼうとしたり、また、ことばの使い方にも変化が現われ、その上、語句が大そう明瞭になってきました。

先日、クラスではり絵をしているC子の様子を観察していたのですよ。糊を順番にもらいに行くのですが、他の子どもさんは割り込んで、どんどんもらって行くのですね。C子も割り込んで早くもらえば、とその時はそう思いました。そして帰宅したC子にそのことを話すと、〝規則に従がうことの方が大切でしょう〟と言われ、〝子どもは成長しているのだなあー〟、と教えられました。今までの自分は、あまりにも子どもに干渉し過ぎていて、子どもを支配することに専念していたようです。これからは、子どもと一緒に進んで行こう、と固く心に誓いました。」

これまで二つの事例について述べてきたが、その後の動向を付記しておこう。

遊戯治療終了後、C子は非常に明るくなり、元気に活動を続けている。これに対し、M男の方は、治療終了後かなりの期間、彼本来の姿となり、元気な日々を送っていたけれど、また最近は以前にもまして、はげしい問題行動を反復するようになってきたそうである。

異質な問題行動を持った両者ではあったが、同じ治療という過程を通りながら、どうしてこうも結果が異なったのであろうか？

イギリスの教育者、ニイルが「問題児は、問題の親、問題の教師によって作られる。」と述べ、また、ヘレン＝パーカスト女史が「親たちの中には、猛スピードで前後の判断もなく、突っ走る運転手に似たような人たちがいる。子どもを自動車のように駆り立てるのである。彼らは、子どもが自分の子どもであるという事実だけで、子どもを牛耳ることができると考えている。彼らは一歩ふみとどまって、子どもがこんな緊張に耐えるかどうかを考えてみようとはしないのである。」と指摘しているこのことばを、おとなは心して味わってみることが大切なのではなかろうか？

（井荻児童研究所）